



頭石（かぐめいし）村まるごと生活博物館

博物館の秘密を盗め！

③ 地名の由来 頭石

頭石は、地名の由来となった大きな石の形が「かぐめる」（頭にさせる）という言葉が当て字となった地名。それを紹介する看板は、住民が手作りで設置したもの。同様な看板は、博物館（集落）内の各所に設置されているが、いずれも新旧二つが並んで建てられている。



通常看板を新しくすれば古いものと置き換えるが、二つ並んでいるところに、地域の人達の活動に対する思い入れの表れではないかと感じた。（本当は違うかもしれないが）

今回、頭石地区を担当する研修生のうち、過疎地域・中山間地域に住む2名が、自分の地域で実践できるかという視点で、まるごと生活博物館の展示ノウハウを盗もうと、地元学的視点でまとめたレポートです。

② 環境協定の看板

市と地域の環境協定の看板には、丸ごと生活博物館の活動が、水俣市が進めるまちづくりの主旨に沿う内容で進められることが明文化されている。



住民主体の活動を行政が支援する上で「認める」ということは、お金を出す以上に重要な要素であると感じられる看板。

⑦ 荒れた農地



荒廃した農地は明らかに多く感じられた。しかし、事前の説明の中で遊休農地の解消に取り組んでいるとの説明をされているので、現場を見て納得できる。

展示物は「用意されたもの」と言う常識的な発想ではなく、現在進行形で表現される。

ネガティブなイメージも説明ひとつでポジティブに

⑨ 山の神とオコゼ

山の神は自分がみにくいのが嫌でオコゼを見て安心したという言い伝えを聞いて、海から遠く離れた山あいの集落で、海のものであるオコゼが、そこまで重宝されてきたのはどうしてなのでしょう？（高級魚で捨てるのがもったいなかったから？毒がきつくて料理の仕方に困ったから？とか）

気がつかない場所の存在と説明理由があっただけでもとても納得できる。説明は「なるほど」思わせることが重要だ。

（番外）頭石サイダー



市内の道の駅で購入。多くの人を買っていた。訪ねた場所に愛着を感じた人が、土地に由来する物を買う「お土産」。

最初は目に留まらなかったサイダーも訪問後はみんな気がついた。315円という価格は、のどが渇いただけなら手を出さない金額だ。人は心が動けば、財布の紐も緩む。物語が大事と言われたことがよくわかった。

① 頭石コミュニティセンター



地域の集会施設が、博物館のエントランス。代表の勝目豊さんより活動の原点についての話を伺った。

座卓や畳の配置や、畳の置き方から博物館を訪れる人への対応の多さを感じられた。まさにコミュニティの中核として機能している。地域の人が、自分の言葉で自らの地域を語る事が重要。（場数を踏むことが重要だろう）

④ 石垣の積み方

地域独特の石垣の積み方について説明を受ける。生活者の支店では昔から当たり前前のことでも、他所から来た人間には新鮮に感じる象徴的な話。



普通の話に歴史。文化、民俗の視点で体系的な説明ができるようになってきているのは、地元学の活用によるもの。頭石に限らず、全国どこでも実践できる。視点を変えて表現することの重要性を実感した。

⑤ 民家の蔵

活動を通じて地域の歴史的な資源が活用されている様子を伺った。環境の変化（人が来ること）で生きる資産があることが分かった。これも、私たちの地域で可能性のあるもの。



⑧ 釈迦堂（文化財の活用）

歴史的な説明とあわせて、ここが地域生活で、どんな場所であるか、昔はどうだったか等、生活に根ざした話を聞くことができた。



小高い山の上の釈迦堂からは、頭石地区が一望できる。風景は山村の風景だが、見晴らしの良い場所の草はしっかりと刈り払われていた。地域の人を訪れる人の関心を持つ場所を分かっているからだろう。（見せる工夫と合わせて、見せるための工夫（気遣い）も重要だ。

⑩ 体験棟（癒しん房）



博物館の活動から生まれた体験棟。訪れる人のニーズに合わせて地域の人が建設、運営をしていた。行政が関わる体験施設など身の丈に合わない立派な施設が多いが、活動の必要性から生まれた手作りの施設であることが意味を持っている。ピザ釜の設置など、自ら楽しむという発想で作られている。出来合いではなく、手作りという部分に意味がある。



制作 広島県 神石高原町 伊藤 邦夫
長野県 大町市 大塚 裕明

